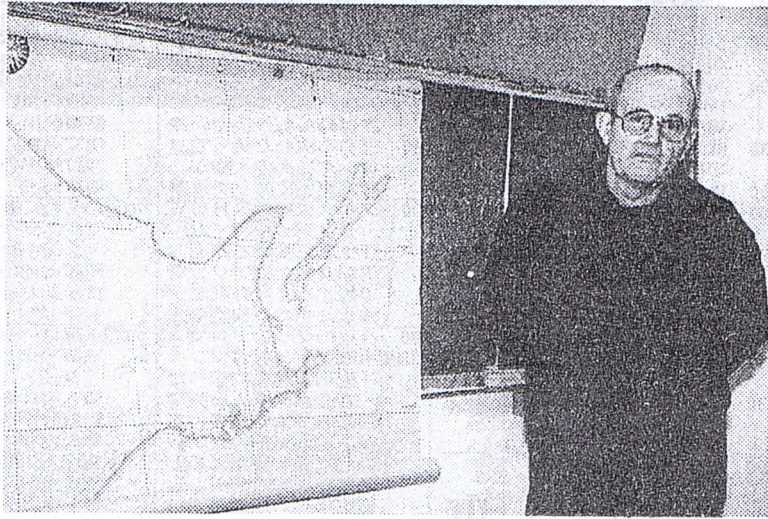


伊能忠敬の実測日本地図

仏の民家で発見



いちはん保存状態のよい第一図と発見者のペイレ教授。現在の北海道の地名はすべてカタカナ表記されている

30年かけ 確認 渡仏経緯はナゾ

江戸後期の地理学者・測量家の伊能忠敬(一七四一—一八一八)が製作したわが国最初の実測地図「大日本沿海実測地図」の写しが、仏ブルゴーニュ地方の民家の屋根裏から見つかり、このほど忠敬の地図の写しと確認された。伊能図は正図、副図とも明治六年の皇居の火災、大正十二年の関東大震災で焼失、写しで現存が確認されているのは国土地理院の一冊のみだけに、貴重な資料という。ただ、フランスに渡った経緯はなぞに包まれており、今後の研究が必要だ。

この地図を発見したのはフランスの国立高等農業学校教授のイブ・ペイレ氏(56)。三十年ほど前、パリ南南東約三百キロにあるブルゴーニュの家を

伊能図の「悲劇」映す

伊能忠敬を主人公にした小説「四千万歩の男」を著した作家、井上ひさし氏の話。伊能忠敬の地図は完成してから実に様々な悲劇を生んだ。シーボルト事件では、恩師の子息が地図を所有して大変厳しい罰を受けたのは一例だ。世のためになると

思ってしまったものが、意に反して世間を騒がせる存在となり、地図は幕府の蔵にしまわれてしまふ。忠敬が死んでもからも独り歩きを続けた地図だが、フランスでその写しが見つかったことは、伊能図が背負った数奇な運命を感じさせるに十分だし、大変感動している。

何枚かの地図が出てきた。地図は八枚で、大きさはそれぞれ縦一六〇センチ、横二五〇—三三〇センチ。

どの地図も皆自分からず、一枚ずつ広げて写しを取り、全部合わせてみて、日本地図だと分かったという。「それがいつ作ったのか」疑問に思い、パリの日本人に問い合わせてみたが、だれも分からなかったため、同氏はその後確認作業に着手。

七五年に東京で開かれた地図学会に測量士の友人ジャン・ピエール・ピノ氏が出席したので、地図のスライド写真を渡し、調査を依頼。同氏が持ち帰った資料で伊能図に間違いはないと推定出来た。さらに日本で調査を依頼していた国土地理院の佐藤隆氏からも伊能図の写しとする手紙を受け取った。

「越前」
会費は03
1572-2271

手紙には「我々の手で詳細に調査したいので、日本語の書かれた部分と富士山周辺の実物大の複写か写真を送るよう」依頼があったが、当時、自由に使えるコピー機もなく、疑問に一切の回答が出たので、しばらく置

くことにしたという。

昨年になって娘のマリアヌさんが研修で来日、コピーを託すことが出来た。佐藤氏はずでに退職しており、日本地図センターの金澤敬知常務理事が調べた結果、図形などから「伊能図に間違いはない」と断定された。伊能図は大図(三万六千分の一)、中図(二万六千分の一)、小図(四万三千分の一)があり、正図と複写した副図があったが、その後、焼失。中図の写しのみが現存する。

同常務理事によると、写しは①江戸末期に外国船が日本近海に出没した際、防備を要請した各大名に配布した②明治初期に

フランス人が測量指導などで来日、軍用地図作成の指導を受けた(その後、ドイツ式に変更)ことがあり、その際に写しが行われた③明治二十年前後、陸軍の手で三角測量による日本地図作成がスタートするが、大正末の完成までのつなぎに伊能図をもとにした地図が作られ、大量に写しが行われた④ケースがあり、このいずれかがフランスに渡ったと見られるが、②の可能性が高いという。

ペイレ氏は、一八四〇年に建てられて以来、いろいろな人が住んでおり、いつ地図が家に入ったかを断定する手掛かりはないと言っている。